知的好奇心講座

トレッスル式鉄橋 高さ日本一の余部（あまるべ）鉄橋のある町 ――香住町

昭和40年ころの写真。煙をはきながら蒸気機関車が余部鉄橋を通っています。

トンネルを抜けると、目の前には青い海が広がり、ガタゴトと高い鉄橋を渡ります。余部鉄橋は明治45年3月に開通して以来、たくさんの人々に愛され、利用されてきました。

その美しい姿はトレッスル式鉄橋と呼ばれる建築様式で、高さ41m、長さ309mの規模は、当時東洋一としてデビューしました。現在でも、トレッスル式鉄橋では日本一の規模を誇っています。

トレッスル式とは鉄の櫓（やぐら）を組んだ鉄橋のことで、当時の鉄道院技師古川晴一氏が最新技術で設計し、アメリカの専門家技師の意見を取り入れ完成しました。トレッスル（橋脚部分）の資材は、アメリカの工場から船で余部まで運んできました。

2年半の歳月と33万余円の巨費と延べ25万人の人々の手によって、山陰本線最大の難工事を完成させました。険しい山道か海路しかなかった海岸線の町に、鉄道が開通したのです。蒸気機関車が元気に煙をはきながら、たくさんの人々を乗せ、住民の足となり活躍しました。工事の間はたくさんの人々が集まり、町も活気づきました。

今でも、そのままの姿で維持できているのは、保守管理をきちんとしてきたからです。海風によって錆（さ）び

夢千代の宿で

脚本家・作家　早坂　暁

ボクは主人公を夢千代とした。本名は永井左千子。置屋の名はばる家。湯村温泉の置屋さんを取材した。

入ってすぐのところが帳場兼茶の間。二階に、抱えの芸者さんが住んでいる部屋が四つ、五つあった。

「芸者のなり手がすくなくなりましてねぇ」

それでも、ボクが取材に行った二十数年前は、湯村温泉には芸者さんが十人ぐらいいた。

それが、だんだん減って、ゼロになった。日本全国の温泉町のほとんどが、そうなのだ。

「“はる家”さんて、どこですか」

観光客が聞く。モデルだった置屋さんは廃業して、今はスナックを開いているのだ。

すでに“夢千代”は郷愁となり、レトロとなった。

春来川のほとりに立つ“夢千代”は、すっかり日本人の郷愁であり、日本人の痛みである。

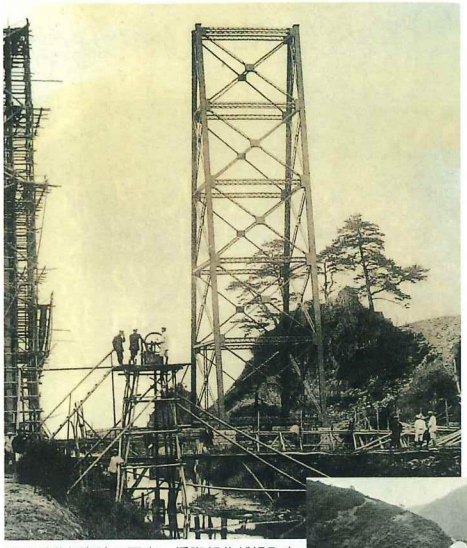
来年で「夢千代日記」のテレビ放送から二十年目となる。芸者さんよ、湯村温泉に生まれろ。

――朝野家社内報より抜粋――

夢千代の里――湯村温泉

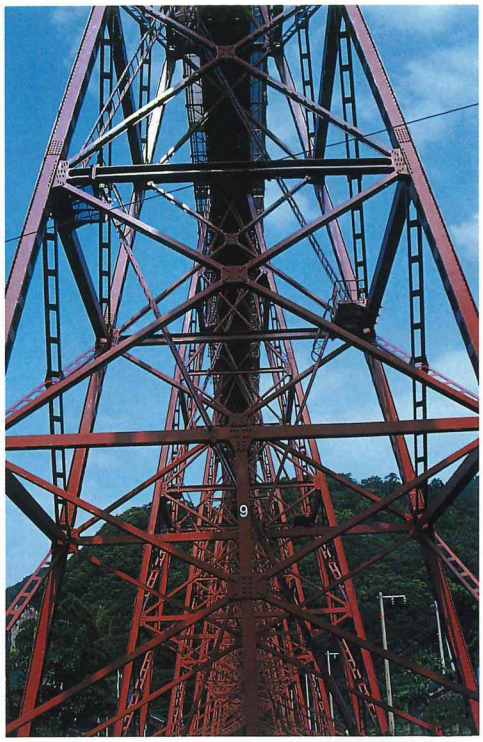
朝堅家（あさかた）

TEL 0796(92)1000



建設が進む当時の写真。橋脚部分が組み立てられています。たくさんの人々と最新の技術によってつくられました。

姿の美しい鉄橋です。交差する橋脚が続きオブジェのようにも見えます。今もしっかり管理されているからこそ、その美しさが保たれているのでしょうね。



るのが一番困ることでした。錆びない特殊ペンキを塗って、鉄を保護しています。

余部鉄橋の下でくらしている人々は、生活の中でも鉄橋と深いつながりがあります。昔、子供たちは鉄橋のはしごを登ったり、橋脚のところで懸垂やおっかけっこをして遊びました。しかし、できた当時は今のように駅がなく鎧駅まで余部鉄橋を歩いて渡っていました。不便な生活が続いていた昭和33年、余部の小学生が阪本兵庫県知事に駅をつくってほしいと手紙を書きました。その手紙が知事の目にとまり、餘部駅ができることになりました。子供と大人が一緒に力を合わせ、海から石を運び、駅までの道やホームをつくりあげました。そして、翌年の昭和34年に念願の餘部駅が誕生したのです。餘部駅には子供たちが石を運ぶようすを描いた絵があります。

余部鉄橋は風雪に耐え、人々の夢と希望を乗せた列車を支え続けています。青い海を背景に赤い鉄橋が映え、美しい姿は後世へと受け継がれていくことでしょう。

写真提供：余部公民館・余部小学校
写真提供協力：澤田郁郎さん
協力：JR西日本福知山支社

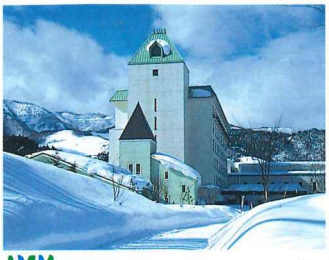
子供たちが海から石を運び、駅までの道や駅をつくっている様子を撮った写真です。今でも余部小学校ではこの写真を使って、子供たちの授業を進められているそうです。

餘部駅には子供たちが石を運ぶ様子を描いた絵があります。駅までの急な坂道を子供たちが一生懸命つくったのかと思いながら歩くと、胸にぐっと来るものがあります。

ひとクラス上の慶びで包まれる
ブルーリッジウェディング

神鍋高原が冬景色に染まる時
ウェディングベルが鳴り響き
幸せな二人が雪のキャンバスに
愛のシュプールを描きます。

ウィンターウェディングプラン 10%OFF
12月・1月・2月の期間中



ブルーリッジホテル
〒669-5372 日高町栗栖野55番地
TEL 0796(45)1200